澄禪和尚行狀記 上

此標題高貴御筆貺之擬證誠

佛
VOL 13

澄禪和尚行狀記叙

般舟三昧經曰是三昧佛力所成盖
言三昧者即是念佛行人心眼即開
得見彼佛了然而現即名為三昧設
有見聞者不須驚怪也嗟失特屬澆
季如說修行尅成之者甚寡善爰有

曜文庫

澄禪進公所謂三昧成就人也吾
與公共在江東久矣是故既見其
公行履尖頭節麁一衲一盂齋戒
凜凜念佛孜孜可謂峻節東行也
公嘗通籍緣山而厭人事蚤逃叢
林潛迹巖穴避穀苦修遂感靈相
獲成三昧若欲見佛不勞思想眞
金色身宛在目前三昧成就凡如
此然視甚自行晝宵拳拳日課念
佛十萬餘聲曾無他業且巖栖節
麁三十餘年緇素同津者肩摩袂
接而置難修苦行特示簡易稱佛

至若友於神仙化於龍鬼則是三
昧成就之緒餘也然其迹已得而
測世或不信者有之乎蓋夫滅三
昧者由思專想寂苟思專想寂則
心潭朗虛而佛日垂影心朗則無
幽不徹佛現無冥不歸然則神仙

之感龍鬼之應是心是佛會一而
致用也豈可驚怪乎其妙在三昧
之純熟而已況與經合誰可疑訝
之洛下有常字隱士者夙有淨因
不浼榮昌西歸之思惓惓萎頓故
招請公大原幽邃時受清誨公爲

人謹慎屢得祥驗秘重所見恒不
輙說然目擊之間尾巴自彰諸士
質問其由記之寶蓄自以為行業
之龜鑑也迺者由善友請將刻梓
之因請予叙之證之予固不文叙
豈敢乎然於公年月行業依惓惓

爾知之者豈辭證之乎況同志閱
之苟能信之不因循止于常課以
為奮勵者則有得乎日時見彌陀
者也若垢障覆深弗克面覩之者
垂終之日迎接華臺變銀成金應
非分外也予深嗟蘭友長亡且喜

Kyōhō 8th year 1723

公之翰光清暉漸露故應需題數字
於其端止證之而已叙豈敢乎
享保八龍集癸卯佛涅槃日
雒東獅谷潭月智忠書於謙敬堂

慶應社

澄禪和尚行狀記上

○夫釋尊權實乃教法区なりハ流生れ機根ハ
万差小逗ぶれども也世ハ澆季に及べども猶賢
愚等しかゝ次希に上根上機有て此法を
修て現證を得る人なきにしもあらゝ
ども自己院ハ其境小入ゝ是を他
に及ぼされ益よいゝる人まれなりをれ自
他平等の要路ハ弥陀乃一教利物偏增会仏の

一門まちくハれ〜と了解して。ぜゝく入とゝ
境界を出て。專修稱名に歸きゝ人有。元よりゝ
聖道乃雜行ハ堪ざる下機の人。是をゝて本願
易行ハ念佛まいうでゝ信を生ぜざゝんや。爰
ハ大系の澄禪和尚ハ何きれ許の人とゝふるを
詳よせどゝいくもむや氏姓をや。風範威儀ハして。
人をゝて欽仰せゝむ。性榮利をいゝ偏ハ安
養をもゝふ志願凜然ゝして。願べゝゝ宗文

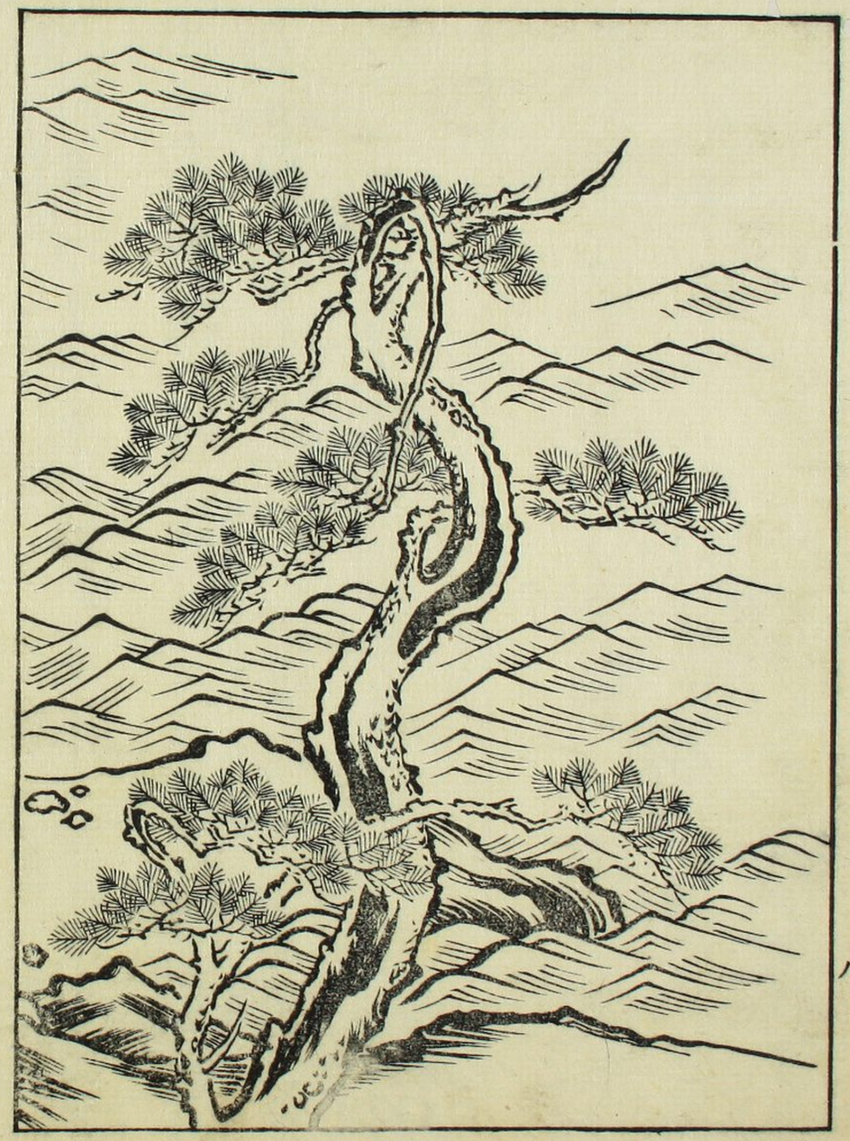
五年堂て。師歳十四。府學暑をおしむ。志ゝ
偏ハ師風ハ靈苗を植ゝむ。棄恩入無爲
真實報恩者乃至れる志。切ハをこゝろ。
恩愛ハ絆をきゝずんぞ。煩に本素を遂
ゝと。決得ゝ。密に芳蘭乃友基をまゝ。
相語らひゝく學徒やゝ。方便をゝぐゝ
て。爲れを遥なる兼燈の許へ通せゝむ。
曰。師乃報身他境ハゝく。某月日鳥部野乃

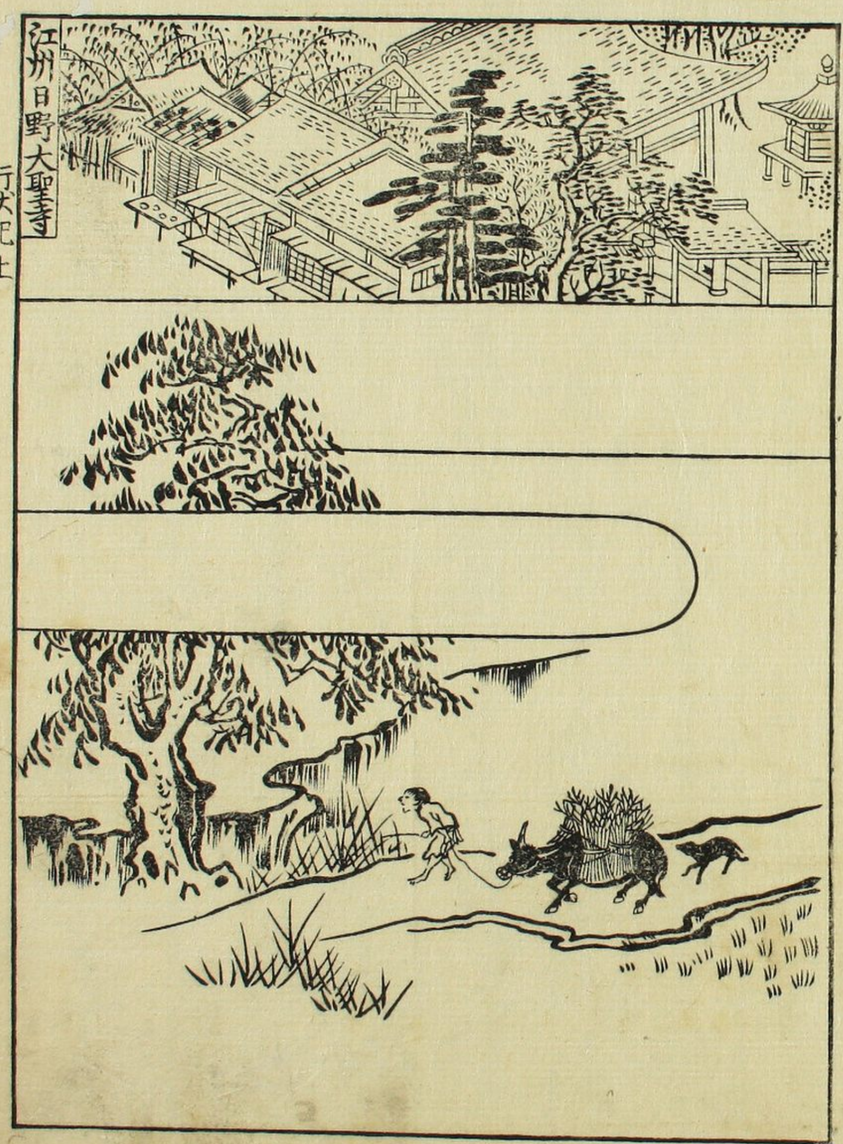
空しく泡露と消ぬる由をかゝ云遺せ給ひきは
さもん。倩ら其過ぎし方を想像に貴き賤と
をのく人々親しき子を思習ひ暫時乃別をぶ
こと悲びあへぬもけうにまいつゝ水さゝれ
ぬ。かの一封を披見て暗なゝぬ親心乃愁痛腸
をかもち矣よあふぎ地ゝ叫焦きゝ泣く。
あさなゝとの法乃事ゝは年月を経
く歎きけむあゝ計きや方便にしく実

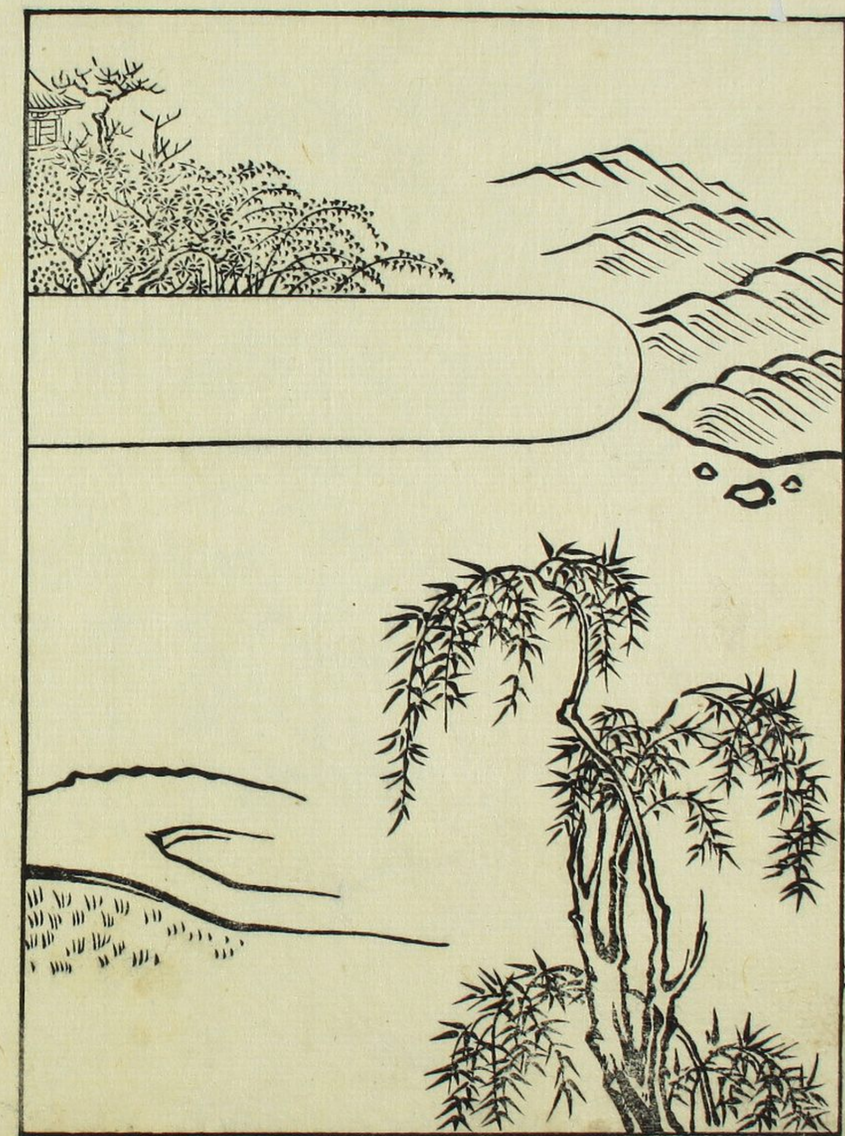
事にあゝびとゝ其金剛乃志確乎ゝてぬけざ
まじかゝ善巧をまうき給ふらんと感慨す
るよりまち。師何なる人まれゝ嘉徴にて。
かゝれむ法を重んじ捨ゝ紀をよくきゝ悪
びゝきを堪忍びゝ濁よまぬ蓮心潔。
いゝひ果ゝるいなん其心操乃貴さは三世の諸
佛と果をなのれと承引給ひむやされ
ど心地勤経小曰菩薩出家作二是念一假使壽

年満一百歳七寶具足。受諸快樂。瑛魔使至。而
免無常。不如代父母及衆生。修菩薩行。當得金
剛不壞之身。還来三界。救度父母。と。亦此意を
免る。斯然法師は歌ふ 新古今 歌教部
肖らば行きて世にも。迎へ来て思ひ出でとも人ふれむ。
仲志學ぶ法より。此等乃教ま。法余こ
く。よく契ひえたまへば。大悟乃化来にてあわも
やもそうむ。覚束なく。暮まこそ。かくて。古

郷は音信し。絶果にまれど。今八一事は公よ
掛るれ。と。世を薩埵よりも。軽く思ひし。
本意はごとく。近江路乃日野河原にて。終にを
づから。誓を知り。所は大聖寺在り上人ふ投陶
し。刹深く。殆へど。上人
其法器なるをを
告げ。
刹刹。
教海をを八へられき。




江州日野大聖寺



○師職性大人志幹の勢ありて根識他よぬきん
で。道業漸成するに及むで。三業を守り清貞
高く高むで。いまだ嘗て目をあげて女人を
視ることなかりき。戒香薫發し必國家の人
あらんと。ひのまゝに褒相ありき。然るに。
師いまだ世中に塵世をにくみ道芽乃増長を求
法こゝろ切なりて思ひ勇猛のおこらぬ
事代数きて。一とせ湯殿山及び巌島へまう

で。道会堅固なるらむる代で祈請せられ
きれ。其社廟乃多れる途中にして折しも咽
喉乃渇きしゝで。おとこれ民家より立入水を乞
たまぬる。舞然として三四聲るゝ只ひとり主
と覓し。男れ瘦衰へて。襤褸を著川ゝ不
浄の床ふむめさ臥て居ゝ。ありきるを見るに
胸れいまゝゝ側へよりて居何乃はしりか
ゝ病乃床より臥ゝるよりや。憔悴せるかほどの

悩よりなどてう又看病れ人ぱまきやと問まて。
けまてでとよ我病ま落くよりちれる。院
に二百日ふれんくとに。近き比までハ親族
なむどつくをゆまえーかど生死乃ちゆる
ふかくよ且累月を経るまくに。奥様く甚多
く誰くこと皆倦果産業にすよせく。妄情
を捨去ぬるもとにしに付きと。宿世
れちどぱはぶやる。泣涙潸然ーち。師爰に

悲泣ー。袈衣をに落をちーて。我を
身れ為よ脱世とるまいのーば。全度人を
懐くとて何ぞも時あるを日あり。孝院よ爰
にきちりあのなんぱ足下れ悩をすくはどむ
むあるべくば必住ーられ思ひゆまふるを。
願生をたまへぞ。主是に力を得く感涙序
ばうはほーつ師ぱて脱衣ー。彼よ著せつ。
うげうーハ裸形ふーく様褥を洗ひ。湯薬

仁事へ勞まして。時く。穢土れ厭しれよ。浄土れ願さしかるべき様を。教ふしゑまへと。いと
よく是を函信し。願ん發起せる功感よや。一
旬ばかりまれ間よ快復しまれど。互ふ者乃眉代云らさぬ時よ。師又雑波の法れ志
くを云学えて別まてを告さまへど。世恩謝よは。何ぐと呉手を合せ禄をれこうれて。
あやはしくみえまれども乃とはあるべくを

なまれば。其よりハ重れ塩路をとまりて。
歳島よ。ゆうで。帰寺したまふ。世一事をを
て。仁恕れさぐうち添き事。記せばしくさん
ぬべし。国ふおもひ出るにつれうこと延暦寺ん
慶實阿闍梨。席門乃法橋重くおもひ。ゆを
ふは。勅よ頼じく趣をさまぬ路頭よ。あや
しきれる病支乃あるしのバ。是を情と車よ
まおりて。程くにもどりあを除入て。時刻

移まして。孫子沛門へハ養ひたまへけるとし
うで。今呼れこゝ[illegible]んで。世を異にして。其
轍を同じ。菩薩代受苦乃益殿ありしむ。また
も。豈看病福田乃大利の教誡を仕伏し。是
引乃やまひの水と。なにもかも。あくれとも
乃よ。人乃為うは。所謂。佛心者大慈悲是を演説
したまへも。朔を多なれ心ぢうひ乃寝が侍大
慈り。似へねゞさうもゞし。恥しくハ善心を

水よ。ゞけるゞまゞ。慳貪乃村雲おほひく。
実ハ菩提心ハ弱くぱとして。かこ河沛佛の
法計ハて。慈悲よ即せる。佛智を者れさせ
ゆまへとこと更。心ひとりよ。新ひ仕わき。
○師二九乃巣。同朋れ練ハよりて。師席を辞
し。東武の三孫山よ移場し。両脉相承しく。
精進社進巻と号ス。然れども。よれハ祢。学
寇よ螢雪を要と世ど。きゞ禅那録名を繹

少々。跡を林藪ふかけれども、こゝを欲し。終り
叢林を出て。名ある霊地を順歴し。安禅す
勝地なれども中に。貞享五年二月一日。出まく。
相州曽我の巖窟ふかく幽景の地を尋ねて。其山
勢あやしく紀家重なり。
しく。ゆゑ。まとひ。実に。浮世の外の仙窟なり
と。懐にうれへて。湯を掛。木食を斎して。釈稱
乃両三時を修し。其坐を去事。

百ケ日。其間。僅小蘿蔔乃一種ばかりを食し。もゝべ
て。餘食を学しめざるもの。又ゝまよりわ。同
州塔峯阿弥陀寺の霊嶽より。もゝを入らせ
まふ。そも此山。ゝ。書く。彈誓上人草創し
て。巖窟より彩ゝ。珍へ。賢き法をきゝ
ひ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。静に会通したまふ。其
窟祖ハ。晴天にも。少ゝこゝまへ。少ゝくゝと。
落る岩間乃苔清水。ゝ。ゝ。ゝ。傘をも

く。是を防ぐよしなどとて。小浴盥を座に擬へ。
玄冬素雪の時にも。單なる綿衣に。襤褸乃
外衣をまとひ。曽脇牽ほどに。目暫もほど
なうして。行住座臥。若ハ親。若ハ稱。孜々として
勤行し。穀をさけ。樹菓を食しく。数日食せ
ずとも。安然として。自得の色あり。又佛
身観を修するに。石上に坐し。或ハ七日。或十日。
法味に飽足して。粮を断こと。大凡旬日に
舊識に語て曰ふ。禪乃床に立て。
年月の過るを。暑寒不覺
事。よれ老乃中なるとて。孫よ其乃行此越
して。芳野四方にとぐろを。其化風に浴する
もの。あまたかぞへべくして。爰小師一日富士峯
遠望し。心中に樂欲をおこす。獨秀せる此高嶺。
天に隣りて山形ハ。面向不背にして。禁ハ由子れ
入海の底くに沈まる。雪れ白妙にして。夕日乃

立居にも。そゝぐ過やらぬ絶景ハ。誠よ三國無
双の霊山なるこれか。永此高山を。彼浄土乃
百宝蓮華に擬して。其絶頂に。宛も相應
せり。大身のいとゞめ来と。贈作し奉らむこ此
所会眉所なく。実位修行志なんよ。何ぞの所
うしぞ成ぜざらむやと。確乎心ゆる。大勇猛心
涌ごとくにおこりて。かゝるよ登臨して。西
方小第一。端身正坐。如法よ思ひ城澄しく仏
身観を修しけり。時ハ長月中旬乃比なるに。雪
つゝ降ちきて。路よ遍身を埋めり。奇
なる哉。雪もとゞくゝ五穀を離るゝ事。五六寸計。
水食を断つゝ。祇強る由に。寒氣髄小ことゝ
縫身堅氷のごとくなりて。絶命にあんとせし
時小浄く彫塊ちゝく。我業障乃こゝろこと。此
山狂低きとなるまたまて。生死乃流ま深ゆ
世雪も亦浅きゞめし。ちくを仏。未仏服弁ることを

得ず。嗚呼悲哉。幸れようとむ。今世は
見佛乃利ハ。成ぜぐとも。我仏は攝取れ幸
利あり。名号を称して。命終せバ。必ず漏乃変國
に生れ。速疾は満月れ如来を。覩たてまつむこと。
更ゆ疑。ものず今所修乃訓法も。共は迴し
て。仏に稱名し。往生浄土見る願れ巨益を期せ
むよとそれより。一向専修れ念は住して。うち
ちる会仏れ幣も。ちぐえてそばふ。只むず

かるに助形へと唱ゆるはよ。不思議や。そより
大雨降下して。雖を切し。涂雪も。須臾れ間
に消果ぬ。其一滴。口は激ぐに。味ひ甘露乃ご
とくにして。忽和雅れ参をいぐし。空立自在
ゆ。身心穏安なる事。実は鵝毛れおとくなれ
ど。奇異乃思ひをれして。豈口稱相続れうちに。
不圓師の後東れ方より。喚招乃音ゆえしかど。
あやしく顔こたまふよ。遥なる空中に。厳飾微

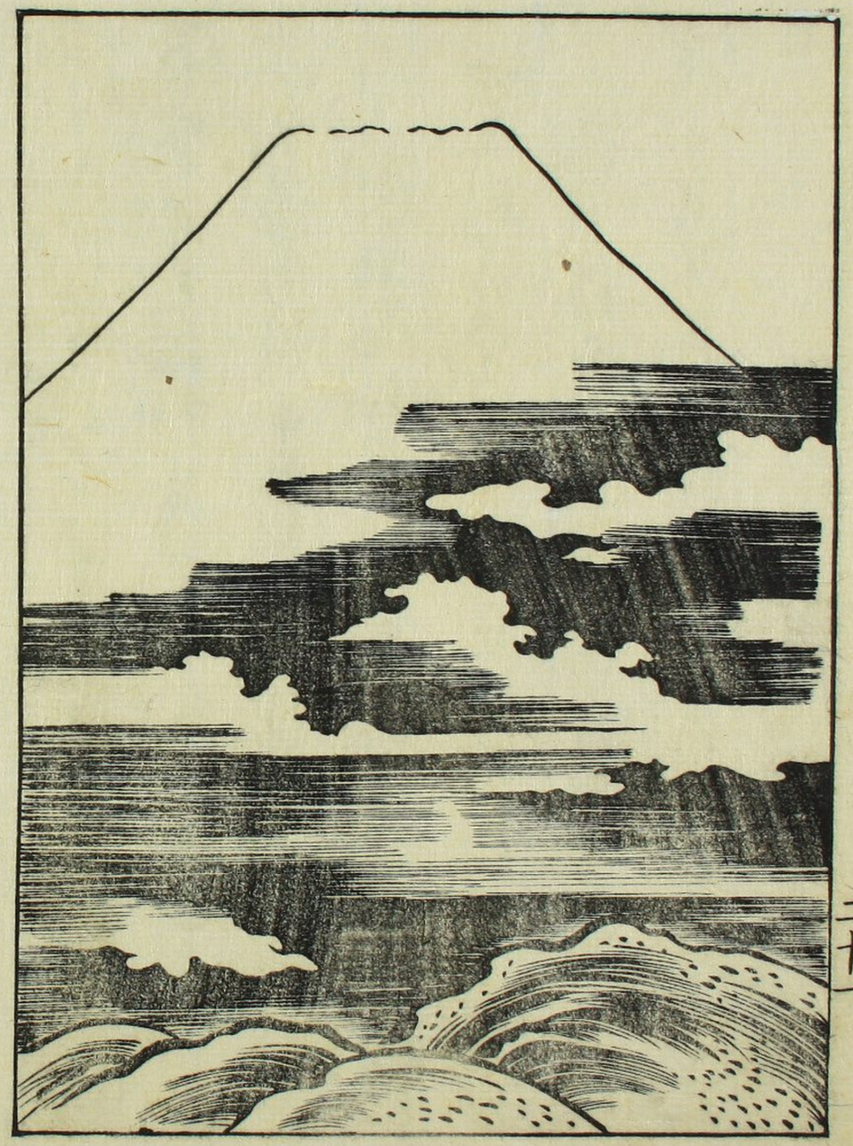
妙に。尺ゞ紀出し。計の。五重れ寶橋行列せり。
五重れ寶橋。横ハ五悪趣を。こゆ。ときの表ハなるんゝ。靉靆しゝる白雲。是をはくへ寺ち。
橋乃大さ。ハいゝゞ。洛れ五條乃橋ゝ似ゝ。第
五級れ橋づゝゝ。嶷十四五歳計ハちんゝゝ
し。容貌端正乃童子一人。立ゞまわゝ。手
に拂子やうれ物をもちて。師を招き給へ
ば是ハ速ゝ進ちんと。一会萠して。第二会
まわゝらゞるに。飄然とかゝ乃寶橋れ中間ゝ
安坐するに。忽又此寶橋ハ。師を乗り。空を
渡。東をはゝゝ飛さるゝ。凡十里ばゝりもや
あゝんと。覚ゆ。ゝれ空中に。住立ハ。こハ如何な
ゝ。ゝ如なるんと。左右を顧ゝハ。富士乃絶頂に
倍せる。大身れ如来寶蓮ハ坐し。光輝赫奕
ゝて。仰れ頂を照らし給ハ。時ハ。師ハれ毛い
よゝゝ。渋表交流し。地ハ面投礼敬し給ハ。且
佛恩を謝しをらんゞきゝん。合掌せんとするに。

悲咽してのゝ云るを得ざ吋よ直ゞて。孫陀如来容を動し。尊し莞爾と微笑し給ふ。其席者。世乃中よハ。似べきこゝもなく。いと尊う。すこゝろて。絲竹乃調ふ。はゞ〳〵迦陵乃仙音をきゝて。為不説法したまへる。説法の志趣。師秘しゝて不宣。斯。優曇華乃仏に。値遇しまつり。且其教乃法を拝聴し。廓然としひらきて。歓喜面よ澄き。稽首し奉

乃に。俄然として。師不覚地よ墜ゝ。さゝくもゝゝ孫よ。其所と見まへば。実ふ塔峯乃禁まそゞ有きる。打しも農夫一人。そこに。おるけるせしゝ。師乃頭髪去れゝ。而顔貌異者乃色あるよ。然まゝ。注来も所を知ゝ。不審住立しゝ。師乃顔を着夫乃はきく。驚川急云して。和尚くおゝゝゝ。何すより。爰よ飛来したまふ

やとあやまりぎに四ぐ。永双翼もうくして。豈
飛こと能得むや。但さてに同ひよれるは。將
まくよりも。何月幾日ちりやとけきまへむ。農
夫あれ希又しに法弱ち。そを今日八是仏
涅槃乃辰辰小ひのあらを殺へと。呵嘖にて
答まれぐ。師愛に指をかぐ考て算計し
殺へる。富士小住山し殺へると。幾六箇月を
殺さまへり。是にをいく。師八是ぎやに。幸乃巖

窟小歸入し。行きてはあ殺へとぞ。かの飛墜の
事実。農夫に秘して。
語りたまざるが故
妄小推度して。和尚ち天狗小擒に
せられて。空より墜られしと
語り伝へる。不信ぜ者もあり。と
なん。此妄説努く信ぜることなれ。
わそ法にあれと。



○師の心純熟し。練行功積まる。所修の親相一切果然ましく。其徳を得給へる。多年運心あ三昧を修せしかども。頓く偏に口稱の本願を仰ぎ。永く親佛をもて。専修一行に帰敬したまふ。実にかくれごとく。佛陀乃境に。身命を抛て。如説小修し給へ。ことに。上古にも恥ざる勝瑞を感じたまへる。然るに。世人薄俗にして。不急乃事に。諍ひ。斯行人を笑に是我等が分にもあらば。易修乃本願なり。身力弱しても。病をうれはず。衣食れなんを心乱もてん。才を安らにして。長眠に会佛せんに。出ずとてもれもて。小智にもん云。是偏小志淆さ所仏なり。実心れなんを。佛を成じがたし。若実心ならばこそ。捨て。捨て会に住して。修しなば。必佛天

も擁護あるべし。さあらば。何なる罪業も終に滅せざらむ。山宗大師乃衣食はうちに。衣食あるとも。ホシきまゝに。仏を礼ども。免て。能く。在業を成ずべし。走劫よりこの乃多佛の出世なり。我等。爭値佛聞法乃時のなうはべ。他乃一切の賢聖と。同時に叢願し。新悪して。菩薩乃在をも。行じはべるべしとも。彩

行甲斐なくして。六在は奴とも。なほつ。なほ因で。悪魔として。瑞れたる犯ごとく。流浪せるまいとは。何なるや。拙く軀命を生し。徒にあるべき。善して。色をぬるゆくこゝあるらめ。已ホ諸乃佛菩薩は。大勇猛を發して。在は行じ。因縁果満成て。我等を濟度したまふ。彼を見已は顧て。涙慚愧をべし。今乃為賢を見て。及ぶべきことを。先彩ふべき孫と

し。思ひなりとて。自改る媒とハせばこそして。
一向怯弱乃心をおここそハ。狂乱有海の波浪
に漂ひ。ちりすゝ。安穏ハ毒を呑む
とにや。嗚呼うゝ。本意なきこんりん。今
適浄土乃一門のこと有て。流機通入ハと。伝
知といへども。将今見仏を要期するに。一人
らして。不惜身命ハ会ハ。おこさばこそは。
悲を得る事かゝるべし。但機ハ随て捨

身乃会を發もゝ。浅深ハ不同ゝ有べし。
うれ下品逆悪の者乃。死苦来逼して。劫
激火劣ハ十会すること。狂純火車ハ長柄を。
ひさゝへをハ。畢竟これ捨身決定の会による
まあゝばや。されば逆悪ハ人なゝばして。ちり
ゝ平生安穏亦静明了ハ対。捨身決定し。
勇心をゝて。勤行ちなんゝ。ゝゝハ親佛
にまれ。若ハ会仏ハ因ゆゑ。ある現身に三昧を

成ぜざるんや。果して。弥陀世尊告曰。伐樹速下斧。還家莫辞苦。と。釈迦如来説三巻れ般舟経曰。自念使我筋髄骨肉皆使枯腐。学是三昧。終不懈怠。と。善導大師曰。所願之境。願得成就。今頓捨身命。仰属弥陀。乃至身口業常與它合。唯萬事俱捨。由如失音聾盲癡人者。此它必即易得。若不如是。三業隨孤轉。它想逐彼飛。徒畫千年寿。法眼未曾開。別付会仏も。亦入它れ方軌をもて。九十餘会を制。只一会と立て。仏

尺仏を期する教えんぬべし。東漸大師乃曰。皆人の已とをれ智恵よまして。近き極楽を書くし。かわど安き世乃と。くるしみとれをハ。浅乃変りや。と宣ふ。されど或人。師に詣て。当修一行に念仏せんと。勵ども。やうやうをされど。終に学得し。智解れ方に引とる所あるをぞ。いと用心を加へ付るんやと。問ふ。ものへざるて。そもハ。地獄の劇苦を。現に見めんざる

あぞ〳〵と。苦味切く答へあるゝ。ぞふを
獄中に有様を。粗見あへざることこれを
あゝ〳〵。苦くも思ひ合せ〳〵時にあり。
又師嘗て。阿弥陀仏を。感見ありしてよ
ん来。会よ夜じて。現前ありはぞと云事
なゝされた初つくハ。天地の間よ色際有
く。仏乃ふぐも。亦まふ恆て。拙れるひゝと。
いゝ〳〵。乾坤も破き去て。今ハ形見乃仏

別。聊も障る所〳〵と。密にれを語るひる。
○かくて。星移り。物換り。或年れ仲秋乃時と
よ。師又富士に絶頂よりぢ登り。幾程と
なゝ世に。まゝに死なん命を。投うけく。當
来乃種を植んと。粮を思ひく。不捨れ光明
をあつゝざ。口稱こ時よ。されへ入る殆に。異
香空よ薫り。天人ちもぐ下りく。散華〳〵。
天衣乃袂をいろぎて。雪霰を防ぐ。偖殆

しるまへり。又空粹仙人一名法乃仙人。元亨釈書第十八より出。来謁し。善哉法門乃龍象なりと。師乃勇猛を讃嘆し。隨喜れ心の表示なりと。未敷蓮華れ二莖を授与して曰。是ハなほ。靈鷲山より出生する。木蓮樹をもて造まる。持蓮華なり。然も天竺より。勅請れ靈像を。彫刻しくは。必此靈木をもて。造乃持物乃蓮華をは。なるをもて。殊よいらゞ紀功徳と思へり。なよ

人ぐ。是を希求して。崇敬されど。然れど
も。國王乃制あるゞあり。甚得る事又希れ
ど。我むうよりも。今。身をきれぐしく。
寺持ちといへども。今これを。師に附屬して。慎
敬て經く妻。人に示すなれと。師爰に
恭拜載したまひて。童しまらく。天仙
に賜るもと。云く。此持蓮華事実。具に録して。
仙授薩埵未敷蓮記ホもち。此後空
仙。師に清貧を内に樂。弁漢乃廉を。

しかゝえて。まれ行くれき。巖の水れ折ふを
さなし。浮世塵ゝ。山すこれ。所くに来現し。
仲のもゝ紀乃ゝよ。和さをゆまひく。法乃
奥儀を示したまふゝ空海仙人ハ。観音
大士乃化現ゆして。代ゝ其名代異にし。屠日
域ハ拯んゝ。大士乃靈場を草創有事。数
多所有る中に。播ほ乃摩耶山。播摩乃法華
山和州乃生駒山等。これ其所なゝ。或ハ又長

谷れ観音を。造立しゝ珍へゝ。呼ハ浸来。救世
観音有孫なる上。空仙ゝ唱しゝたまふ後。
殊ゝ会しゝ。ゆゝ。枕中。毎月乃十七日より。
廿三日まで。かゝ乃号れ別行を修しゝ。
然れども。強を通じ。大士れ号をも。稱せば。
唯会仏しゝ珍ゝ乃こゝ。人其教を同へゝ。永ゝ
専修一行乃ゝ乃のなり。殊薩埵ハ。ゆゝ仏を
号敬しゝて。寶冠ゝ拯載しゝたまへゝ。あゝ

佛といふよりの外。なほ八乃ゆ之。聖衣了
遠さべきハ。必然さりと。仲斯天仙乃感に新
ゆたまふゆ。ほ毛くとりるゆ幸ら波。一時
廓然と。其證端を得。生身れあるぬ未を
脫仰有てよりさいりる。二六時中。心乃欲を
ゆよ適く。佛菩薩。及依正二莊嚴れ淨土を
感見し。且其土よ。神遊さるに。自在なるゆを
得さまふといへども。宗祖大仲乃教誡を恐れ
弱ひく。いうをたうと見うやうれ内證を
深く隱密して。他人ゆ口ハしたまさ法
ハ。例乃慎まれじなるとと。いと尚くて。守り
いくまども。常れらぬ世ぞ。公も不了過
く。学ゆを得どハと思。且余累年なれまり
し。法乃奥ゆ。何くれ乃淨ハ示など。学そ毛
まふうちに。そらし行ふ。其言れ業を学乃
く。あれどもゆ無求しうかぐひまれど。止こ

と成得ざるべく。敢必他はこゝろをべからざる
ぞ。二尊を拒ぎ世。語り学ぶ所の世ハ末代
なりといへども。かゝる揭焉おどろくべう
やうく。孫もあるべうく。覓ぶ伝わぬ。
けきぞ。先明大師も。若得定心三昧。及口
稱三昧者。心眼即開。見彼浄土一切荘厳。説
無窮盡也と。宜ひ。亦言三昧者。即是念仏
行人。心口稱念。更無雑想。念念注心聲聲

相續。心眼即開。得見佛了。然而現即名為定。亦
名三昧。正見佛時。亦見聖衆及諸荘厳と。作
られぬる。且見佛といふ。念佛乃期とする所の
往生乃果報。先相なるが故。念佛ハ是見
佛ノ因と可謂。ぬる。求て。因果相准じて。親
仏ひとへに。口稱にをひても。三昧乃名を
得ぬる。ぬきで。稱名乃行者ハ必ず。見仏
を期して。念佛をべきぞ。勿論なり。然れど

も。世人ハ。念仏三昧を修をといへども。いま
く。臨命終に見仏を期する人。甚まれなるなり。
聖光上人ハ曰。念佛三昧發得乃事。まれこ
そ。念仏者乃大切なるなり。是を能習ふ面
々事まては。一切乃行ハ。所期を思ひはめて
こそ。行をれ。人ごとに。行とも思こそで。念佛
申ハ。悪業なれ。念仏三昧發得せんこそ。所
期なれ。人ハ中古る學匠ハ。是こそ

能沙汰をべき事にくあれ。是ハ違ひる
人ハ。義我ガ義とおもきかるなりと被仰。
稱名乃行者ハ。必三昧發得を期をべ
き乃沙汰。勅策いと艱なり。已に我光明吉水乃
両大師。三昧を期して。各發得しをまへり。
浄業を修をる乃徴素。誰ハ是を仰望せざ
らむや。世ハ澆季に及べども。なんぞあれが
ちハ。卑下をべきや。今師乃三昧ハ現證。

仰ぐ見はんべし。又長明乃曰。うれ佛菩薩
は。衆生れ心をいくしてゐむと願たぐ。其
人乃前よ。弘まんと。誓ひ願へ。是を学れが
ら。行ひ弘して見せらぬい。我心れ科なり。
妻子を哀がぢく。哀なり。名利を思ふが
ぢく。行ぐ。頭きたるむるかるうぢ。
心をいるに事をなくて。世れ未なれど。者
がるし。拙き身まれぐ。叶ぢと思ひて。退

沈を發れる。品志乃浅きよりおこるれ
ぢと。ちまぢ。今それ一二を摘むで。愛り
筆記し。浄業者乃哀樂を勵しすむる
ぢれなり。

○師萬機普益乃会佛を。如法よ修し。
まふ。伝法れ実内しまくる。菫ぢ。川しゃ。
四方に芳ぢき学をあるて。法ふるつれ。
道をまるひて。在俗草れごくになびき。

師を敬事奉いつも更なり。時に龍神現
て。師に問ふへ。会佛乃願は教を乞。かし
こ孫を結び。因に龍神庶幾さらく何
にもあれ。師乃を持し孫に所は法送と。我
に屬したまへ。真乃善知識に。渇しを
澄ん擬し。且も又我國界は法寶と。崇名を
らむと。師乃曰。私木食草衣乃境界なれば
霞貯ることはなしといへども。先年空仙より富

士は高嶺にて感得乃持蓮華の賜あり。是
をなむ屬もべしぱと思ひよれど。仙乃戒さ
まに言は葉もたのまで。許可を得て。扨は恵
じなんと。其後三とせを強く仙人来訪ん
折々。件乃形ひを演きまへど。ゆるさず
によりて。又乃年龍神来り孫の時を待て。孫
に二壁は持蓮乃うち。一を壁を授さまへに。
於神歌表踊躍し。又は舞足乃踏ことを覚

ぜとなん。所徒光乃てれぞゆやかく幽顕乃
類とに感ぜられひまれ。

○所塔峯れ閑静ふ新をひそめて。物をかき
松ゝく嵐の音も皆與実相れ教をけとは。
自れ心乃すゝるまにゝ禅悦乃食を啖し。
浮世を夢と観じ引。まれゝかるもいり
う。幾とせれ春秋を送りむゝへゝ。今ハ中く
人れ知る名も厭りを覚えるまへゞ。去て

一舉万里れ雲に乃を井なふる武湧むと。狂
ゝくむゝよ。惜むとゝもなる名殊まれども。流
石に別ゝ。巌乃苔衣。著る事れを不。
なふだりなるとゝ。泪乃わもいどにおち方人
ふ。けまよひ出たまひゝく。千山万水れ旅ま
空と。さぐりくて。近江路や。平子乃里れ。染
山乃もがゝ。感ありて。寂ゝ。傳るまなさ
ゝふ修ゝたんをればゝゝ心もすゝぬ

爲ことかゝばりけ菴を結びて行ひをゝ
ゝなる。已に十六年。其軒端を。乃に袁を
そへ。居住すまだ。貴くも覚えて。袖を
ぬらしつ。師よりつゝ。他乃供養をおろれみ
給ひて。人乃労を思ひ。財を費さゞして。行
をたゝ先や祖とす。それ閑室は堅撲ハ。僅
に筵やうれもの一枚に限りて。ゆゑ成土間
に寝かゝへます。すへきまんまれ。小褐ひとつよ。

濂水囊は風よりすびくも。僧室ハ戒よりさ
きて立かゝることかこと聖乃誡めをひき
むもたゝとく思ひやられて。除もよりく。
道場乃関の岩うど。踏なゝ。往て抜渇。
浄土往生は要路を乃まるに。自己小修
行。多載乃苦修。親法るどハ。毒沙法しる
まで。只易行は安心起行をゝまやうて
ホ。ゆえ行。粧あれ。なのうぶ強乃。

一心不乱の言葉を。審問しまれば。何の風
情もなく。ただ救我あらば仏と。心に思ひ。
口より唱るのみ。更に言葉を求べからざるむ
とまでも。小強の一心。親強れ三心。皆ゆかれ
の至心。往生我国の言なり。又此至心
往生我国の中の南無阿弥陀なり。
南無ハ是帰命れ義。帰命ハ。是救我あらば
や。初むぬ救我あらば。仏と稱会るハ。三強の

所詮よりて。宗門に行れ骨目なる。凡愚老
うれうこ。此安心より決定せば。多年辛苦目
の雑行ハ。なさざるものをとのまふによる。
余爰小心落居く。指位をく。師の実行を
尋ぬまでば。累年日ふはざ夜ハよねざて。
身を苦しめる。勤苦れ希有人なり。雑修
雑行して後の教。会佛より礼あり。其所證を
仰ぎば。得定れ花開く得く。名一天よぬ

孟ひ〜聖なれば。三昧發得れば言。往生に無
疑。とゝひ来よ二尊ふたゝびまるやう。金世
俗乃訓もあゝぐ。日比れいぎかゝさを
敬覚〜うらもく。浄業乃増進もろもろ
師れ法澤乃清き流をにそゝぐ。我才
拙うして。雖有覚えて。遥に志をもとべる。
供養せ〜に。或時師乃曰。さに来〜初りゝ
ゐハ。初巳まれくまれば。雨を樂〜こ。此山

まて命路らむと。思ひ〜ゞ。近き比より。
遠近人の尋よるに。日ふ喧くなりもく
ゆくゝ。本意に〜ぶ。されば。又才を云水
ふまぐへ〜。いとかゝに居を移さゞやと
乃ゝまへば。余が曰。恐れ〜ゞ。兼て是此岳
遠を推度〜。山林乃勝地をたゞらひ
をきわ。愛に請じまゝん乃其所ハ。何國
もあまゝど。節ゝる比。厳よはぐきゝ。大原古

和谷に阿弥陀寺ハ。そもそも孫誓上人終焉乃
地なり。我彼山乃院亜ハ因有。尋ねまら
むよ。障あり。師先に相州塔峯阿弥陀
寺に壷嶽乃巌窟ハ。年経させ給ふ。是上人
始く罪さきまゝふ山まち。ふるに。上人其
孫を取まへる。大原山ハ。師亦登臨し。
滅を取たまりんハ。二境同じく。上人一師
に開基ふして。而其寺其号を同ぜるゆ。

ちなき偶然なるにあらず。宿孫有て。
上人に礼れよ命じて。師を迎へ給ふなる
べしいざせまへと進るふ。師もさいが。
ちなりき祖跡とハ。覚しきゆへ。添さ機
孫にふひれく。諸し。則享保改
元乃年丙申に冬。江州平子に峯を移し
く。孫ハ大原山ハ住さまふ。彼寺を相さ
こと四五町ばらちなる山上ハ小廬

をたゝりらふふ。まづ規制をきて。うかゞへど。師遥遠とゝく曰。彫塊乃衣。をわれがらかゝ乃供養れ巡よハ。堪ざる乃ぢうな。位施乃罪れおそゝれど。萬ふ倹を用ひ。居ゝ膳を容るに。過べゝ況。此規制乃ごとゝ紀ハ。至益なりと。いあこたまふにより。て。其度さ僅二度に過ぎ。俗ゝ縄床と。一畳をまうゝるけこ。本よりいげこふ。住ゐ

まふにも。厠と浴室を擁へ殆ふなり。これ世人乃怪とゝ見。まゝ又山ゞこれ人を。此例希なるべし。禁ふ垣ゆひまゝ。れどゝく。来詣をとゞむまゞども。郷系乃人ほどひつ。剃それ法ハ。世乃人の種ならぬ。法未業にて。るら世殆ふ。止ごとあゝ法方さへ。けゞき山路をよゝ。登ら世。法孫を結ぶ世殆ふ。かゞうれ人目も。ゝげくなりゝてゆまゞ。愛

を亦本意ハ違ぬと覚えさせ給ふ師常に
人乃崇敬をいとひて曰我自を省ふ無徳
にして他を化度する法器ふあらず只自
己れ往生残期して閑静ふ念仏せんと草
乃菴をかまへて起臥窓に四衆四方より
来り殊ふ礼拝等をなすをきす涼く慚愧を
ふ所なりそれをろ人をし人志まにん心ふ
かきく。よりく数十万れ答拝を修し

ぬ。又信施を恐れがる。飢を凌ぐ。肌をかくく
にほ。事足乃ことにして。あしかやと思へど
も。過不及心ふ任せずと。嘆息したまふ
によりて。余曰。他乃供養を停て。自れ功徳
こそ。れさむハ。それ恐れ無数からじ。たもあま。
衆を身にうきそ。師乃心を安かるし
めん。詮る亦。資孫れ且越をまれ一人に限
まらぬやくやと以へど。師悠然として是

を許し給ふ。然まをどもを米穀を用ひ。蠶豆
粥飯とし給ふ。されども是を用ひ苦く。い
と能動くまへるを。見るに思ひ。只米ばか
ふと進まて曰。壮年乃山ずこふハ。辛苦を
よく堪へ。穀類ハ更よりこと免さず。あら
ゆる草木ハ葉のごとくを。煮て粥よかへ。
齋ハ用ひて。日ハ童ね給ふ。今ハ潔清年
高く。童鉄なるぬ時ハ。其氣力

不限有べきれど。今日ハ昔ふひとかるゆゑ。
法ハ為我ハ為ハ。曲くを米乃数を用ひ
給ひ祢。生世を祢ばふ祢。むぎよかさせ
ゆまくむやと。申使る理りにおき。承引
たまひく。拾れよりも蠶豆をば。永く用ひ
ゆゑ。今伏して思付るに。師ハ是禅之味
為食乃法を成じ。又ハ天龍夜叉等ハ冥府
乃供養やあるまむ。されど人供を受給ふ

るハ。只其内證乃実を隠して。外相ハ凡僧
小似同したまふ色ふくぞ。有ぬるんたも
なくて。自然まつ。月を重ねて。嗽食おう
と事れあるとしう必ずもいと新色和悦す
ぬしませしをぞ。是何れ由とういまべき。考
途れ見をもつてハ。論ざるなれ。且師其
霊異をよび。其受化乃業の感得等を今
爰に略していをぞ。師生平餓鬼飢渇乃多る
ことを憐むぐ。施食れ法を。一夜に二度づ。
其昔よりも怠りなれ。希ふ人あれば
群鬼涌法して。水食を希ふ。夜くすす
をよびをぞ。師又平子れ峯に。年を積
こたまへる間。驀ふ文ある自然石あり。
実千引もかくやとゆるを。奇なる哉一
夜乃うちに。高岩れ菴前よりれぐ屏風
を引さまむ様ようれ形境を成ば。

宮むぐ鬼神乃力を加へきんと。ろろ人怪こ
あへこと。
○或浄業乃住尾。師をとゝらひきゝんと思
ひ立ぬる。一里計こ所乃ほとりにて。少ゝご
ろ多訓し会珠を失ひぬまこと。薫修すん功
こもされゞゝにおしゝとひとゝはゞやきつ。登
山しまるに。師呈下れおとゝ拾へる珠数ハ是
なりや。まゝせんとて。投出したまへゞさいハ

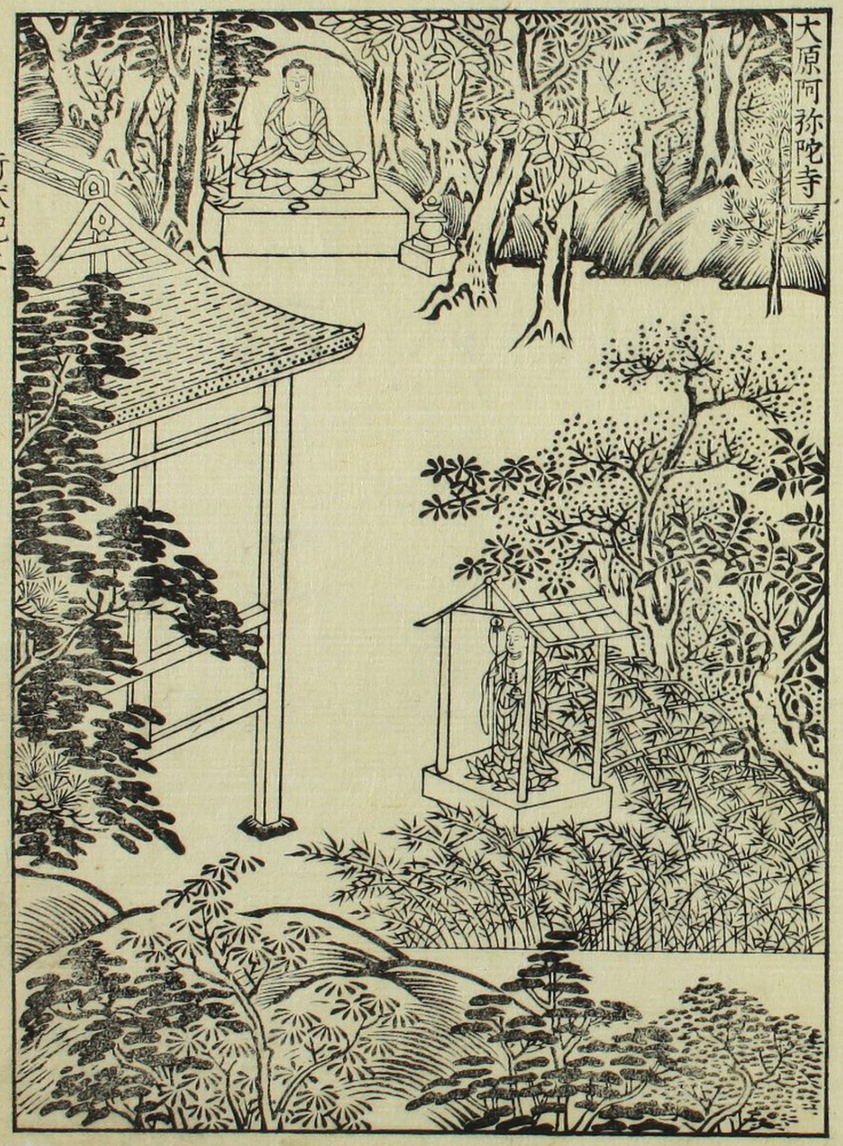
そこおりひろけゞそれ沸るやと。悦びあまち
て袖を志おゝ河。
○又ある郷ふ。ひとゝ乃老婆。年比師れ尾を。
二河なゝ貴こてけこゝ兒山路ハ老乃ゝれ
思ひこえまむ。せめてこの仏ゞろも。供養
しなゝんと。我吟ゝ仮れ初穂をとゝちけゝ
げゝ一樹乃下ふ恭備亞て。遥ふ志すん誠
を運びゝ師に供ゞまるふ。折こゝ其

日。有住乃人に設齋して。師を供養しまゐらむと。登峯しまゐるに。今日ハ已ホ。菊を受をはりて。宜よろしく。住乃人家妻子。何方より。借じまゐやとうかゞへど。住れそこに住る老姫に。餓鬼と答へ。貧しかりける老女乃誠を感じ。随喜乃為に。他日とひよれるホ。入金さる事れし。但我家に在なゞら。其志をもてこゝ。ゆゑに供養乃しそ。未曾かゝ山より。登ホこれを得ぞとかゝらぬ。或ハ又。翌乃日。何國乃ゝれく。必尋問しなむと。菊を宜よ伝云れ。暗にゐかゞ。こゝ。れりき。

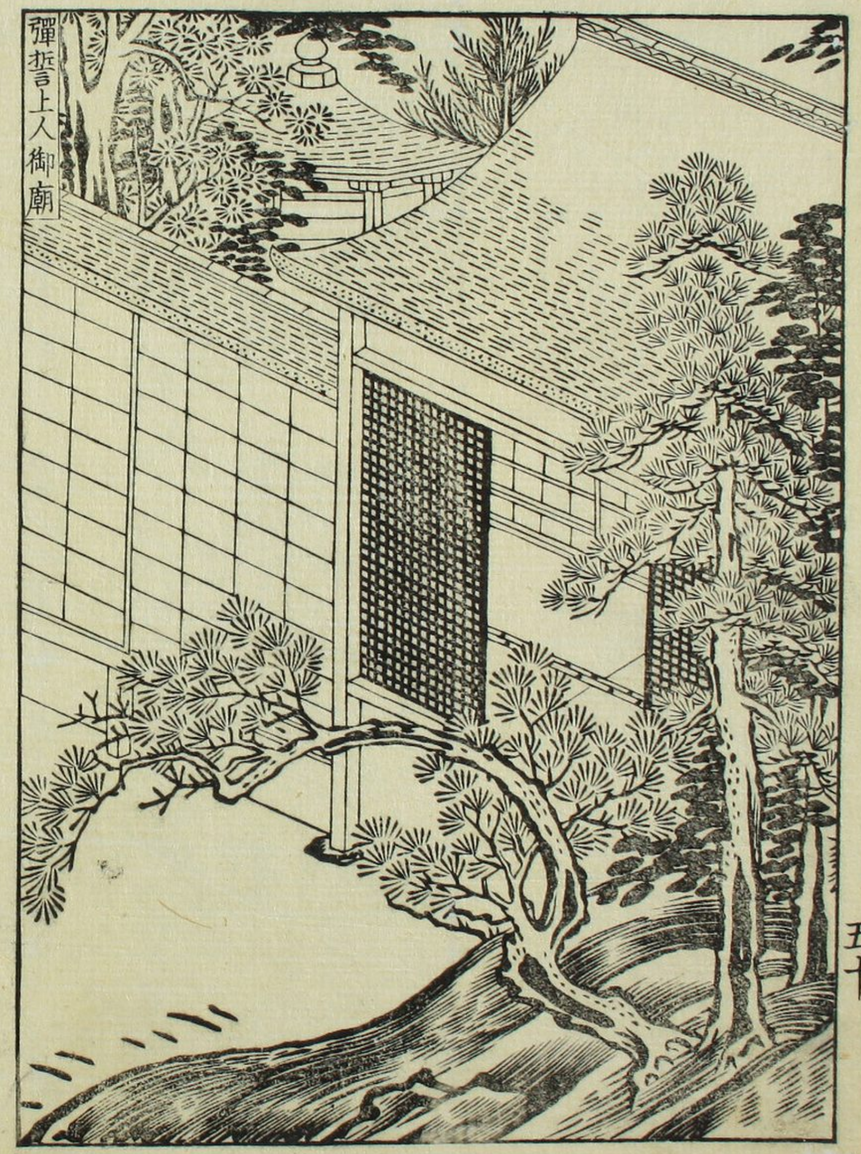
○師人をける。愛顔に情眷て。少してれり。まける。益乏よ。素じてや。過国乃歳ゐを。まる。或ハ悩しく。打臥るこの。師を切ホ仰ぎ。高く。夢中に。唱し。且法乳よ。浴せし

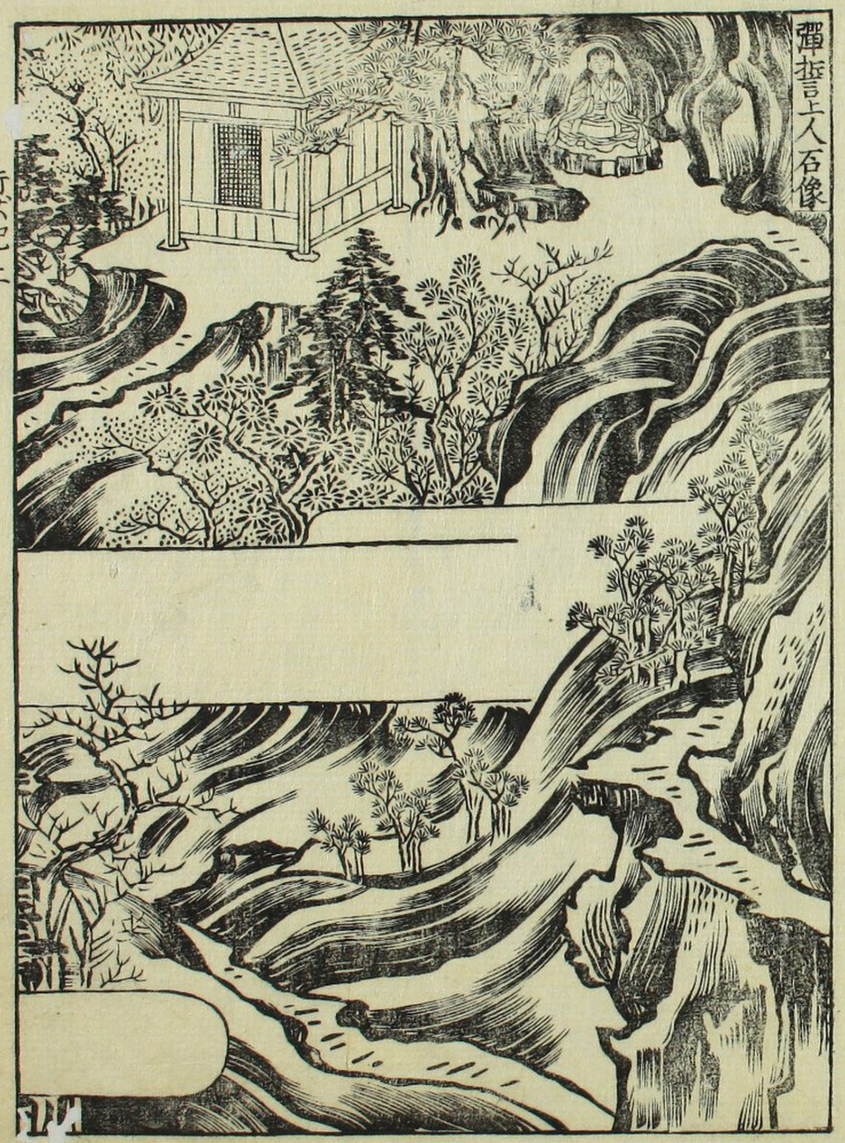
類。往々に其事あるべし。爰に筆記を。般舟三昧経乃中に。念仏得定れ人を説く。豫知去来之事といひ。亦同経に曰。便於此間見十方無数仏土。其中人民天龍鬼神及蠕動之類。善悪報趣皆了知ともあれど。凡上件れ事。此聖教に偶然少々て符合に。敢更に疑惑を生ずることなれ。き。自下れ類事も。今乃経文をもて。照々顧もべし。

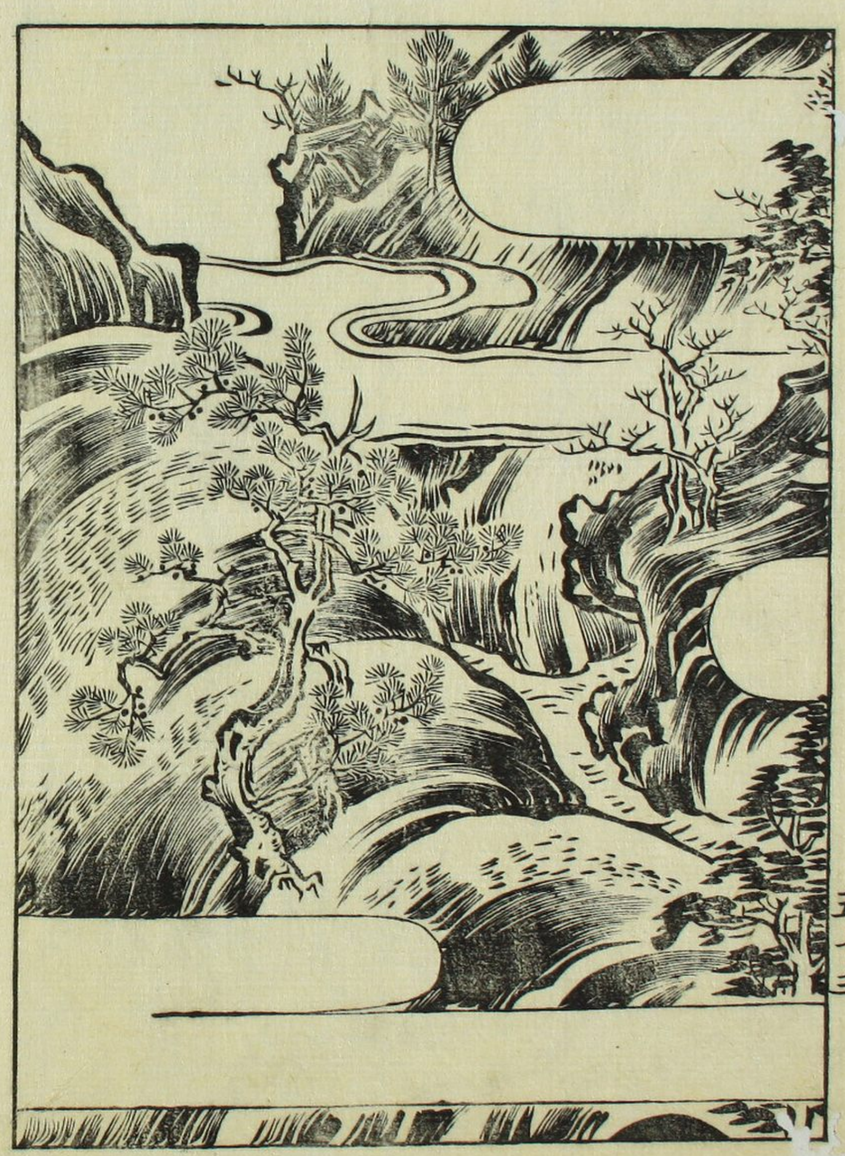
○享保元年れ冬。大原山上乃庵室成ぬといへ。ども。小後ち石壁高く聳て。嶮く。南前れ岸崩れて殆危。来陽永貞待得て。若干れ人力を発し。地乃巖を切おとして。両れ岸を築む。相議して。これを実たまひて。何ぞ時あり日なるに。けぐられ人まを労ける事れ。まと。堅く停免ありに。其事止ぬ。然るに他日不図自余が死乃ちに。地の石壁を切て。南乃

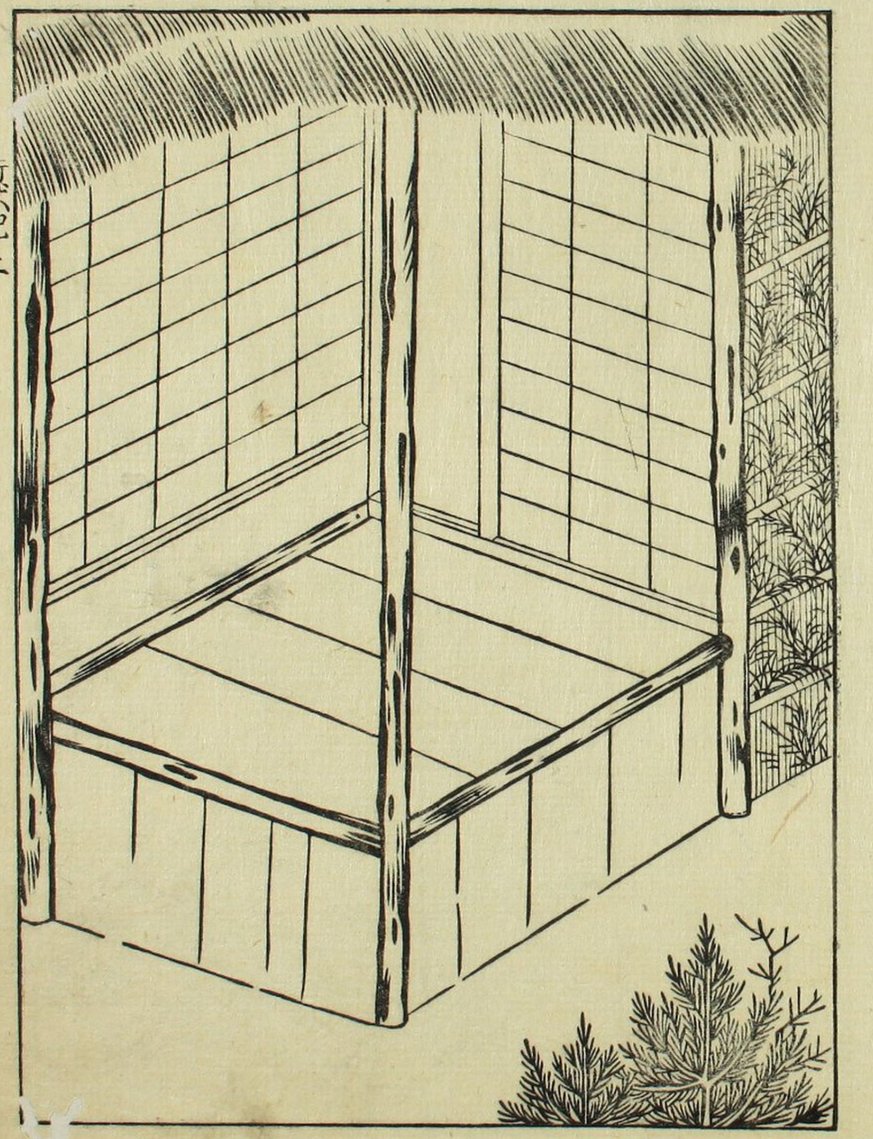


岸ハ一面ハ巖をけむぐ。内外ハ焼を成でゝに。
手を打て奇なりとゝ禁の寺主ハ。是を審問
すゝに。前日ハ何でこゝに来るるなるとゝ。語ら
きぬ。爰　　こゝれ
香　　山神及　　池
ゑつぬ　　鬼神力状　　な
かく速　　加ゝる　　ふ
なり　　師を　　事
成頭ハ。　　供養　　を。


彈誓上人御廟


禪誓上人石像





○予が親属及舊知れ新殁ありごとに。其法律を懷ふして。師乃回向を請むと欲するゆ。余が言を聞きゞして。某も死せるよりとりまいぬ。

○往年我家より。何所乃犬有て死るに。法名を付て回向来る。師ゆ又回向を依憑に。然るゆ犬れ畫。師乃山上に現るゆあるゆ。師他日ゆくまゝく。牽所を顯来るゆ。未解脫せざまてゞやと懺こ。切よ者ゆこなく。回向せてかゞ。

彼犬將今。生を轉じて苦域ゆぬるを孕を得ゆとゆと語りくゆまゆ。ちまに乾て。其先蹤をおこゆて。惠表比丘大乘經を講讀しくゆゆ事考をきを青雀。欽吉苑ゆ生じ。我東衢大師園戒乃奥旨を。演者ゆを学て。小蛇死して。其頭乃中よりゆ。一ゆ蝶出て。空に乃がゆかゆを見。或ゆ天人れるちゆゆ。

体と見し人をあるをきわ。
今これらを
おもふり。此ざも
師乃考る
徳ふ感じて。
小孫なる
なお先わと。各伝を僅しこと。
澄禅和尚行状記上終